

報告・資料

石敢當・亀甲墓考

佐藤 考一¹

A Study of *Ishiganto* (Talisman Stone) & Turtleback Tomb

SATO Koichi¹

キーワード：石敢當、亀甲墓、ビジュル、風水師、儒教、仏教

はじめに

石敢當と亀甲墓は、ともに中国から沖縄（琉球）へ伝えられた文化要素である。だが、中国から同様に伝わった獅子像・獅子舞ほど、中国から日本本土への伝播の事例は伝えられていない。どうしてなのか。本稿においては、石敢當と亀甲墓についての先行研究と、沖縄、中国の識者からのヒアリング、及び筆者自身の実見から、石敢當と亀甲墓とはどういうものなのか、またどうして、日本本土への伝播の例が少ないのかについて考えてみたい。

一、石敢當

(1) 石敢當とは何か

石敢當（いしがんとう、せきかんとう、シーガンタン: Shigandang）とは、何か。『石敢當』の著書がある小玉正任は、『辞源』（北京商務印書館・1984年）の説明が、最も的確だという（以下、小玉1999 [7-9]）。それによれば、唐（618-907）や宋（960-1279）の時代以来、住民の家の門口、あるいは、市街地や村里の入り口に、常に一つの小さな石碑を立て、その上の方に「石敢當」という三文字を刻み込んだ。これを以て、めでたくないことや災難を圧迫し禁ずることができるようにしたのである。「敢當」とは、当たる所、敵がないことをいう。石敢當が、五代晋（907-960）の勇士（石敢）の名に由来するというのは俗説である。石敢當の歴史はもっと古いと小玉はいう。

中国人研究者の蔣明超は、中国の石敢當には、唐代末期（10世紀）に南方の福建省で誕

¹ 桜美林大学リベラルアーツ学群教授

生した、一般的な石敢當と、宋元時代(13~14世紀)に北方の山東省泰山地域で出現した泰山石敢當があるとしている(蔣2019 [199])。蔣は、日本の石敢當研究は中国南部に限られていると批判している。福建省のものも、山東省のものも、どちらも「辟邪」(魔除け)用のものであるが、泰山石敢當は「鎮宅」、つまり住宅を鎮める方法であり、高い所に設置される(門の棟と同じ高さ:蔣2019 [219])。これに対し、南部の石敢當は「止煞」つまり突き当りなどの地点の煞気を止める手段で辟邪する(蔣2019 [218]:写真1A・1B、2023年7月1日撮影)。気は高い所から低い所へ流れるので、低い所の邪気を止めるとよいとされる(低所に設置:蔣2019 [219])。風水術的な属性が強く、動物の頭、八卦などが刻まれた石碑もあるとしている(蔣2019 [218]:写真2、2023年7月1日撮影。写真3、2017年6月23日)。同じ中国人研究者の周星は、台湾における石敢當の風俗は福建省のものと大同小異であり、石敢當の設置は、道士あるいは堪輿家(風水師)の指導で行われるとしている(周1993 [8])。写真1Aから写真7に示したように、沖縄でも中国や台湾と同様な位置に設置されている。



写真1A 那覇市内の交差点の角の店舗の石敢當



写真1B 実際の設置の様子



写真2 壺屋地区のシーサー石敢當



写真3 末吉公園近辺のシーサー石敢當

では、現代の中国では石敢當はどのような扱いを受けているのだろうか。というのは、沖縄でよく見かける石敢當を、筆者は中国で一度も見ることがないからである。これについて、蔣（蔣2019 [206]）と、周（周1993 [10]）は、ほとんどが文化大革命（1966-1976）で破壊されたと述べている。中国に現存する石敢當は、文化大革命の破壊を免れた少数のもの、それ以降に建立されたものだという。石敢當の故郷である福建省でも石敢當は少なく、泉州では、石敢當が何であるのかを知らない人までいたという（蔣2019 [211]）。

(2) 石敢當の沖縄への伝播と独自の発展

石敢當は、台湾や、タイやシンガポール等の東南アジア地域に多いが、これらの地域への福建省南部の人々の移住によってもたらされたと考えられている（山里2007 [45]：写真4、2000年8月23日撮影。但し、これは泰山石敢當である）。

では、沖縄県への石敢當の伝播はどのような人によって、何時頃なされたのだろうか⁽¹⁾。沖縄県で現在残っている最古の石敢當は、久米島の西銘の泰山石敢當で、建立は（おそらくは中国から移住した）風水師によるもので、1733年だという（山里2007 [47-48]）。二番目に古いのが、石垣市立八重山博物館にある泰山石敢當で、1736年から1795年の間に建立されたと考えられている⁽²⁾。三番目に古いのは、那覇市の当蔵町の泰山石敢當で、1848年以前の建立と言われ、当時の琉球王だった尚泰（在位1848-1879年）に遠慮して、泰の字を削ったのではないかとされているものである（山里2007[48]、「石敢當(古さ)」）。これは、沖縄本島で最古の泰山石敢當だという説がある⁽³⁾。

沖縄県では石敢當がほとんどで、泰山石敢當は少なく、筆者が実見したのも、八重山博物館と、当蔵町のものだけである。これら2つが、山東省の出身者によってもたらされたか、その所縁のある人によって建立されたのかは不明である。さらに八重山博物館のものは、上部が一部欠損しているので、元の大きさもはっきりとはわからない⁽⁴⁾。2013年2月24日に筆者が実見した館内の説明板によれば、高さ51cmである（写真5・写真6：八重山博物館より撮影画像と、拓本の画像の使用許可を頂いた）。一方、当蔵町のもは、屋外に建立されており、門の棟と同じと言うほどではないにしても、高さ110cmの大きなものであり、昔はブロック塀にはめこまれていたという（上江洲均・宮城篤正1975 [9]：写真7：2023年6月30日撮影）。蔣のいう「鎮宅」の役割を果たしているものと考えられる（蔣2019 [219]）。



写真4 東マレーシア・サンダカンの泰山石敢當



写真5 八重山博物館の
泰山石敢當



写真6 八重山博物館の
泰山石敢當拓本

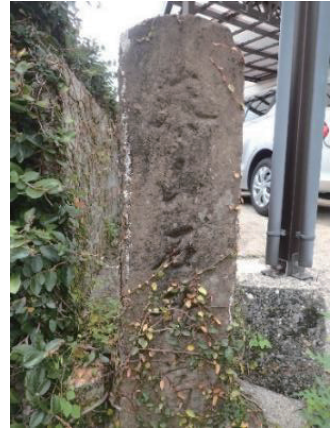


写真7 那覇市当蔵町の
泰山石敢當

ちなみに、沖縄の石敢當については、乾隆21年（1756年）に冊封副使として琉球に来島した周煌が帰国後に著した『琉球国志略』卷四下「風俗」に、「屋上・門前には多く瓦獅を安んじ、及び片石を立て石敢當と刻す」と記している（山里2007 [47]、小玉1999 [94]、吉海2021 [1-2]）。清国で既に廃れかけていた石敢當が、琉球に多いことに驚いているのである。沖縄では、何故石敢當が多いのだろうか。これについて、山里は「沖縄には（ビジュルという）石に対する信仰があり、自然石を道路の突き当りに立て魔除けとする習俗もその中から生まれたものである。…このような固有の習俗が存在したところに中国から石敢當が伝えられ、両者は習合していったと思われる」と述べている（カッコ内筆者補足。山里2007 [49]、吉見2021：写真8A・8B、2011年3月3日撮影）⁽⁵⁾。



写真8A ビジュル信仰の一例



写真8B ビジュル信仰の御神体

確かに、地元の石に対する信仰が基礎にあったことが、沖縄での石敢當の流行に繋がったということはあるのだろう。だが、それだけだろうか。筆者は、2023年3月に那覇市壺

屋地区を訪れた際、あまりの石敢當の多さに呆然とさせられた。高橋は、その数を52基、そのうち古いと思われるものは4基だけだとしている（高橋誠一2008 [11]）。壺屋地区の道路は、迷宮・迷路のように道路が巡らされ、蜘蛛の巣の拡がりようになっており、あちこちに突き当たりや、交差点が存在する。したがって、石敢當だらけになるわけである。

高橋は、壺屋地区の道路がこのような形態であることについて、首里王府が進めた格子状の集落形態ではなく、それより古い集落形態が残ったからだと指摘している（高橋誠一2008 [19]）。そして、高橋は「直線的に地を這うように侵入してくる悪気を防ぐために石敢當が設置される」ことから考察を進め、「悪気は直進しかできないという思想は、単なる俗信ではなく、台風時の強風を和らげるという実利的な面をも含んでいた。そのような基本原則に立脚してこそ、『迷宮』・『迷路』であった」と結論付けるのである（高橋誠一2008 [11]、[21]）。悪気、冒頭の蔣の言葉を借りれば、煞気は、台風の風も含むものだったのである⁽⁶⁾。

最後に、中国から沖縄に伝わった石敢當は、16世紀末には日本に至り、北は秋田、青森、さらには北海道まで広がっていったと言われるが、実態はどのようなものか（高橋誠一2008 [11]）。小玉によれば、1999年現在、石敢當が最も多く分布しているのは、やはり沖縄県で、全県で1万基以上あるのではないかと推定している（以下、小玉1999 [13-16]、[19-72]）。次は鹿児島県で1153基、その次が宮崎県で90基を数える⁽⁷⁾。他は、秋田県27基、徳島県と大阪府の11基、東京都の10基である。分布の北限は、北海道の函館市1基である。鹿児島県と宮崎県（鹿児島県に近い南部に集中）に建立数が多いのは、かつて沖縄県の前身である琉球王国が服属した薩摩藩の領地だったため⁽⁸⁾、沖縄との交流が多かったためと考えられる。

ただ、交流があったからと言って、多くの石敢當があるわけでもないようである。たとえば、琉球料理に欠かせない昆布の貿易があったはずの北海道は1基のみである（これは、沖縄からの移住者が少なかった可能性がある）。一方、秋田県には27基ある。小玉は、秋田県教育委員会の佐々木栄孝の考え方を引用し、久保田藩時代に石敢當の風習が秋田市内の武家屋敷に持ち込まれ、災害厄病を防ぐために市内各所に建立されたと考えている（小玉1999 [26-27]）。これについて、松井は、近世の久保田藩校の教授だった大窪詩仏が石敢當の知識を武士に広めたと推察している（松井2019 [131]）。こうなると、漢籍から直接、石敢當の知識が広がった可能性もあり、興味深い。ただ、日本全国で見ると、仏教とともに伝わってきた獅子像や獅子舞ほどの量が伝播されたわけではない（上杉2001 [16]）。やはり、石敢當を伝える道教や風水師の存在がないと伝播は限られてくるのだろう（写真9A・9B：川崎駅前の石敢當。川崎市民の宮古台風救援への返礼に、宮古島民が1970年に贈与したもの。伝播に宗教的な意味はない。2022年6月3日撮影）。



写真9A (表)

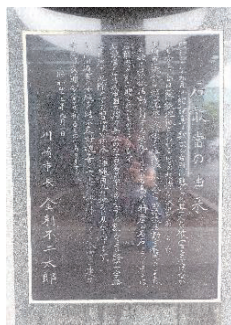


写真9B (裏)

写真9A・9B 川崎駅前の石敢當

最後に壺屋地区や金城町を中心に、筆者が沖縄で撮影した石敢當を紹介する。これらを見ると、石敢當の建立は風水で言う辟邪だけが目的とは思えなくなってくる。材質が石ではないものまであり、かなりファッションブルである。写真10Fと10Gは陶板製。写真10Mはプラスチック製と思われる。写真10Nは篆書体か。写真10Cと10Kは石敢當の當が新字体の當になっている。



写真10A



写真10B



写真10C



写真10D



写真10E



写真10F



写真10G



写真10H



写真10I



写真10J

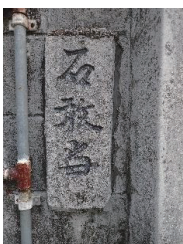


写真10K



写真10L



写真10M



写真10N



写真10O

また、石敢當の多くは、本土の家の門の表札とほぼ同じぐらいの大きさのものが多く、例外的に大きいものがある。筆者が見たものを3つほど挙げておく。写真11は那覇市金城町の石畳道の石敢當である。実測した人のブログによると高さ約90cmである⁽⁹⁾。



写真11 那覇市金城町石畳道の石敢當 (2023年3月23日撮影)

写真12は、那覇市国際通りの旧三越前の石敢當であるが、1972年建立で高さ150cmである(小玉1999 [65])。写真13は、名護市のバス停近辺にあった、これも100cmぐらいの高さである。



写真12 2018年6月18日撮影



写真13 2018年6月12日撮影

二、亀甲墓

(1) 亀甲墓とは何か

沖縄の墓の形には、代表的なものとして、亀甲墓(きつこうばか・かめこうばか)と破風(は

ふう) 墓がある (宮里2003 [96]) (赤嶺2003 [76])。亀甲墓も破風墓も、大きな墓である。破風墓は、王家の風習が後に庶民生活の中に沈下して、今日のようにひろまったものである。沖縄で初めての破風墓は玉陵 (たまうどうん: 写真14) で1501年に、尚真王が父である尚円王の遺骨を改葬する際に作った (赤嶺2003 [76])。沖縄本島に多く、大きいものは人の住めそうな家程の広さをしている (写真15)。沖縄では、現生の家は仮の宿であり、墓は永遠の住みかである。亀甲墓は屋根の部分が亀の甲の形をしているところから、そう呼ばれる (写真16、写真17)。岩山に横穴を掘る方法⁽¹⁰⁾と、石をアーチ状に組んで、その上に土砂を被せる方法がある。中国南部 (華南) の影響を受けたものであるが、破風墓よりも後代になってあらわれたものである。もっとも古いものは、1687年頃に作られたとされる (赤嶺2003 [76])。



写真14 玉陵 (2023年3月23日撮影)



写真15 首里の破風墓 (2023年7月1日撮影)



写真16 首里の亀甲墓 (2017年6月23日撮影)



写真17 名護の亀甲墓 (2001年12月7日撮影)

破風墓も亀甲墓も、首里王府時代は、庶民が作ることは固く禁じられており、これが許されるようになったのは、1879年廃藩置県後、である (名嘉真1999 [66-67])。大きな墓は、火葬にする現在と違い、かつて洗骨改葬制を取っていたためである。洗骨改葬制とは、墓の内部に一度、白木の棺を安置し、3～7年後に棺の蓋を開けて、水や焼酎で骨を洗い、厨子甕 (骨壺) に収め、墓内に再度安置することをいう (「洗骨葬とは? 詳しく知りたい」

<http://boseki-info.jp/contents/masiso/senkotsu.html>, accessed March 1, 2016)。この厨子甕は、その口に頭蓋骨がそのまま入るぐらいで、全体がかなり大きい⁽¹¹⁾。このため、亀甲墓の場合、内部は奥行きが約2間(3.64m)もあった(名嘉真1999 [73])。本土の墓は、遺体を埋めた地点に石塔を立てる単墓制か、土葬で埋葬場所と別に石塔を立てる両墓制が多い(高橋繁行2021 [25-26])。洗骨改墓制では、上記のように頭蓋骨が尊重されていた。

沖縄の墓は、本土とは違い、菩提寺にあるわけではない。寺と関係なく、土地を買って、墓を造営する。沖縄では多くの人が死んで初めて寺を選ぶ(以下、宮里2003 [49-50])。沖縄における仏教の歴史は極めて浅い。琉球の時代に王家とその周辺にしか影響力はなかったはずだが、奇妙にも葬式だけは一般的にも仏教にゆだねてきた。いわば、葬式寺である。葬式オンリー寺である。「檀家」あるいは「門徒」という用語は死語どころか認知すらされていないというのが沖縄の現状であろう。写真で見ればわかるように、非常に大きくて立派な墓である。これは、家族墓の他に、門中墓(父系親族集団)や、気の合った者同士で作る模合墓、村墓などがあるためでもある(名嘉真1999 [62-63])。筆者が、那覇で見た亀甲墓の一つは、墓というより、トーチカか小要塞のように見えた(事実、沖縄戦では、墓が防空壕に使われたケースがあったらしい)⁽¹²⁾。墓の代金としては、総白御影石の破風墓で、土地代を含めて、2000年代に新築したもので1千万円という事例がある(宮里2003 [122])。より大きな亀甲墓では数千万円になるという⁽¹³⁾。本土の墓は総額で200～220万円が相場だといわれるから、沖縄の墓の値段が非常に高いことがわかる(「お墓の基礎知識」<http://hakamago.com/tombstone/market-price.html>, accessed February 29, 2016)。

戦前の沖縄県民は、ハワイや南米に多く移民した。移民の特色について、矢内原忠雄が1957年に琉球大学で講演した際、以下のように述べて批判したという。「率直に申しますとあまりに郷土的な団結心が強すぎて、移住地の社会に対して同化する、移住地に親しむという気風が少ない。…働いて儲けた金を移住地における生活条件の改善のために使うことが少なく、郷里に送金をする。郷里に送金をすることの主な目的は何のためであるかといえば、郷里で墓を立派に維持する、立派な墓をつくることである。…金を使う使い道としてもっと生産的な使い道があるのではないだろうか。立派な墓を築くということは、非生産的な金の使い方である」(濱下2000 [163-172])。沖縄県における海外移民による送金額は、1912年の83万余円から統計が判明している。その後、1921年までは概して100万円前後の送金額となっている。昭和期にはいと年次を追って増加し、1933年(昭和8年)には200万円を超え、最高は1937年(昭和12年)の356万7094円である(現在の金額にして、昭和初期の1円=¥3000～¥4000といわれているので、1937年の送金額は大きく見積もれば142億円前後という膨大な金額である)⁽¹⁴⁾。一人当たりで、最大69万2920円ぐらいである。これが殆ど、お墓代になったのである(濱下2000 [176])。こうした沖縄県民のお墓へのこだわりの背景には、先祖供養を重視する中国の儒教の宗教的な側面の影響があると言われる⁽¹⁵⁾。父系親族全員の遺骨を埋葬する、門中墓のあり方には「先祖を敬う」儒教の意

識が強く出ているし、既述の「葬式オンリー寺」という表現にも見られるように、仏教との関わりが淡泊であることにもそれは感じられる⁽¹⁶⁾。

(2) 亀甲墓の伝播と途絶

亀甲墓は、中国の福建省(写真18)、そして福建省出身者の移民の多い地域では、よく見られる。筆者は、台湾(写真19:台北、2014年5月30日撮影)や、東南アジアのフィリピン(写真20:マニラ、1989年3月23日撮影)、マレーシア(写真21:クチン、1999年8月18日撮影。写真22:サンダカン、2000年8月22日撮影)、シンガポール等の事例を知っている。だが、日本本土では、唐人墓(中国人の墓の意)の事例以外は聞いたことがない(田中2017)。そもそも、中国国内では、皆同じ墓なのか。筆者は、北京や南京、上海などで、亀甲墓を見たことがない。訪中時にたまたま見かけた、上海の墓(写真23:2019年11月7日撮影)は、日本本土の墓(写真24:2022年8月30日撮影)と多少は違うが、やはり方形の墓(塔式墓に近い形状)であった。



写真18 福建省永定県の客家の亀甲墓 (李恩民教授提供)



写真19 台北郊外の亀甲墓



写真20 フィリピン・マニラの亀甲墓



写真21 東マレーシア・クチン郊外の亀甲墓



写真22 東マレーシア・サンダカンの華人墓地。山の斜面に亀甲墓が並ぶ。



写真23 上海郊外の墓地 (2019年11月7日撮影)



写真24 京都府、相国寺：藤原定家、足利義政、伊藤若冲の墓
右端の伊藤若冲の墓が典型的な方形の墓（塔式墓）である。

中国人の友人や学生に聞くと、ほとんどの人は自分の故郷の親族の墓が中国標準であるかのように答える。彼らが嘘をついている訳ではないのだが、それが中国の墓の全てでもない。教えている学生の多くは華北・華中の出身者で、彼らは講義のスライドで見た亀甲墓を、見たことがないといっていた。誰か、中国全体をきちんと把握していて、客観的に説明してくれる研究者はいないだろうか。偶然であったが、身近にそういう人が1人だけいた。

桜美林大学国際学部時代の同僚で、現在は同大学のグローバル・コミュニケーション学群に所属する李恩民教授である。李教授は、華北・華中・華南の全てで、農村調査に従事した経験があり、農村の墓の形状が地域によって異なることを知っていた。筆者の求めに応じて、李教授は、福建省永定県の客家の亀甲墓（写真18）と、亀甲墓ではない山西省の土葬の墓の写真（写真25）を提供してくれた⁽¹⁷⁾。山西省の埋葬方式は仏式だという⁽¹⁸⁾。中国は広いので、墓の形状は、地域によって、また宗教によって、異なることが、これではっきりした。また、李教授によると、方形のコンパクトな形状の墓は火葬で、都会で近年建立されたものに多く、土葬のための広い墓地の土地の確保が難しいことが理由の1つだとのことであった。これは、火葬率が99.9%を超える日本とも共通する理由であろう（高橋繁行2021 [129]）。



写真25 山西省の墓、2006年。土葬（李恩民教授提供）

おわりに

文化要素の伝播には、宗教が絡むことが多い。中国から石敢當を琉球（沖縄）にもたらした風水師も広い意味では道教の関係者と見て良いだろうし、沖縄の石敢當の隆盛をもたらしたビジュアル信仰も宗教絡みである。琉球人が日本本土に移住した場合、それに伴って風水の要素の一部でもある石敢當が持ち込まれることがあった。但し、交流があっても、移住にまでは至らない場合は、住居に付属する石敢當はもたらされないこともあったら

うし、移住した人が亡くなり、その後継者が風水に関心を持たなければ、石敢當を建立する慣習は途絶えたであろう。これが、日本への石敢當の伝播が、中途半端で、個人的な趣向を除いて、あまり増えなかった理由と考えられる。

では、儒教的な要素の大きい亀甲墓が日本に伝わらなかった理由は何だったのだろうか。これについて、主要な理由は、既述のように中国から日本に渡来した中国人が亀甲墓を作る習慣を持つ地方の人ではなかった場合である。これでは、亀甲墓は拡がらない。江戸時代には、福建省からの移民もいたはずだが、住居は長崎の出島に限られていた。もう1つ、副次的な理由として考えられるのは、中国人のように儒教を宗教としてとらえる側面が、日本人には少なかったのではないか、ということがある。日本への儒教の伝来は5世紀初め、仏教の伝播は6世紀半ばと言われるが⁽¹⁹⁾、日本人は宗教としては仏教を重視し、儒教は儒学、すなわち学問・道徳として受け入れた側面が大きかった⁽²⁰⁾。以上が、仮説の段階ではあるが、石敢當、亀甲墓が日本に拡がらなかった理由だと筆者は考えている。

謝辞

本稿の執筆に当たり、石垣市立八重山博物館から泰山石敢當の写真と拓本の画像の使用許可を頂いた。また、李恩民教授から中国の墓の写真2枚の画像を頂き、ヒアリングにも応じて頂いた。記して深謝する。

注

- (1) 日本最古と認定されている石敢當は、沖縄県ではなく、鹿児島県志布志市松山町泰野の石敢當で、1616年の建立である。「石敢當 (古さ)」、
https://www.kinseiizen.com/ranking/25_ishiganto%20oldness.html, accessed 27 August 2023.
- (2) 注1の資料参照。
- (3) そんなに貴重なものなら、もっと大事されていてもよさそうなものだが、筆者が2023年6月30日に、これを那覇市内で探した時は大変だった。資料として(上江洲均・宮城篤正1975)をコピーして持って行ったのだが、まず、当蔵町という地名をどう読むのか、わからない。那覇空港の観光案内所で尋ねた担当の若い男性にはわからず、年配の女性の方を呼んで来て、ようやく「とのくらちょう」であることがわかった。そして、タクシーでカーナビを頼りに出かけたのだが、現場についても、どこにあるのかさっぱりわからない。結局、同行してくれた年配のタクシーの運転手さんが、周辺に丈高く、生えていた雑草をかき分けて、やっと隠れていた泰山石敢當を見つけてくれた。那覇市街角ガイドのホームページの写真では、説明板がついていることになっていたが、これも失われていた。石敢當に関する無関心ぶりでは、我々日本人も、中国の福建省の泉州の人を笑えない。NPO法人那覇市街角ガイド、「コース4古都首里城下の史跡探訪」、<https://www.naha-machikado-guide.com/course4.html>, accessed 27 August 2023.

- (4) 八重山博物館の宮城光平学芸員からの2023年7月13日のメールによる御教示による。
- (5) これに対して、中国人研究者は、中国にも靈石に対する信仰はあり、それが石敢當を生んだという説を紹介している (蔣2019 [206])。
- (6) 悪気 (煞氣) に台風の風を含めるといのは、毎年多数の台風の被害を受ける沖縄ならではの発想である。筆者は、仕事の関係で、時々沖縄の自衛隊の基地を訪問するが、基地内の交通標識がポールの上まで上げられておらず、中ほどで止められているのを目にしたことがある。どうしてそんなことをするのかとの問いに、答えてくれた幹部自衛官の方は、「台風の時にポールの上まで標識を上げておくと、強風でポールが折れてしまう。台風の直前に標識を下まで下ろす手間を考え、中ほどで止めている」と、言っていた。
- (7) 小玉は、山形県に伝わる石敢當の面白いエピソードを紹介しているので引用する。「山形県大山の加茂から鶴岡に通ずる道路のつき当りに、高さ63cm、幅48cm、厚さ15cmの頁岩の碑があり、『石敢當』と陰刻されている。明治のはじめ、鬼県令の異名のあった三島通庸 (酒田県令：酒田県は現在の山形県の一部) もこの石敢當をはばかり、道路改修計画を変更したという。三島は石敢當が数多くある鹿児島県出身であるから、石敢當のいわれを知っていたのであろう」 (小玉1999 [28-29])。三島通庸が鬼県令と呼ばれたのは、後年福島県令時代に自由民権運動を弾圧したためだが、酒田県令時代は、近代的な道路開発や洋風建築を導入し、「土庫県令」と称された (「三島通庸」『米沢市』, <https://www.city.yonezawa.yamagata.jp/5849.html>), accessed 2 September 2023. そんな三島が、石敢當を尊重して、道路改修計画を変更したところがポイントである。三島は、石敢當を建てた住民の意を酌んで、計画を変更したのだろう。意外に柔軟な考え方でできる人だったようである。
- (8) 「薩摩藩」『日本大百科全書ニッポニカ』,
<https://kotobank.jp/word/%E8%96%A9%E6%91%A9%E8%97%A9-69258#E8.97.A9.E5.90.8D.E3.83.BB.E6.97.A7.E5.9B.BD.E5.90.8D.E3.81.8C.E3.82.8F.E3.81.8B.E3.82.8B.E4.BA.8B.E5.85.B8>, accessed 28 August 2023.
- (9) 「沖縄本島デカイ石敢當選手権」,
<https://dailyportalz.jp/kiji/Okinawa-big-ishigantou-championship>, accessed 30 August 2023.
- (10) 首里の末吉公園内に、この方式の古い亀甲墓がある。原生林の斜面に沿って、階段と手摺がつけてあり、その奥にある。2018年6月20日の午前中に、たまたま末吉公園を訪問した時に、手摺に那覇市役所の注意書きが結びつけられていた。読んでみると、「横穴の奥に骨壺があるが、持ち主がわからない。わかる方は市役所まで連絡されたし」という趣旨のことが書かれていた。不審に思って、同日午後には沖縄県立博物館で説明員の年配の女性に伺ったところ、恐らく、沖縄戦で一家が全滅した家のお墓だろうとのことであった。戦争に関して筆者には責任はないし、責任の取りようもない。だが、沖縄を戦禍に巻き込んだヤマトンチュー (本土人) の子孫の1人として、非常に申し訳ない思いがした。
- (11) 2013年2月24日の筆者の八重山博物館の頭蓋骨の模型を入れた厨子甕の実見による。
- (12) 「亀甲墓」『沖縄の裏探検』、

<https://ameblo.jp/quox-umiyamagusuku/entry-10355455010.html>, accessed 29 August 2023.

- (13) 2023年3月23日の玉陵管理事務所及び沖縄県立博物館の説明員からの筆者のヒアリングによる。
- (14) 戦前の1円が現在のいくりに相当するのは、様々な解釈があると思われるが、たとえば、以下を参照。Buy Sell, <https://buysell-kaitori.com/column/coin-column-kosen26/>, accessed 29 August 2023.
- (15) [公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会]、[越智:114]、を参照。また、2023年3月23日の筆者のヒアリングに対し、玉陵管理事務所、及び沖縄県立博物館の説明員の方々は、亀甲墓は中国から伝わった儒教由来のものと考えられていると答えてくれた。
- (16) 「沖縄のお墓事情 – 特長的な形と大きさの理由」、<https://guide.e-ohaka.com/kind/okinawa/>, accessed 29 August 2023.
- (17) 新聞報道などを見ていて、中国では土葬は法律で禁じられているのかと思っていたが（『火葬では天国に行けぬ』と数十人自殺』『朝日新聞』1993年4月22日、9頁）、本人と家族の意思が尊重される場合もあるようである。もっとも、日本でも天皇家は昭和天皇まで400年間土葬だったし、自治体の条例で土葬禁止区域が指定されている場合もあるが、国の定める墓地埋葬法で、土葬が禁じられているわけではないそうである（「今後の御陵及び御喪儀のあり方について」宮内庁、平成25年11月14日、高橋繁行2021 [129]）。
- (18) 以下、李恩民教授からの筆者の、2023年7月5日のヒアリングによる。
- (19) 『【詳解】日本史用語事典』三省堂、2005年、27頁。
- (20) 「儒学」『日本大百科全書（ニッポニカ）』、<https://kotobank.jp/word/%E5%84%92%E5%AD%A6-527993>, accessed 31 August 2023.

参考文献

- 赤嶺政信『沖縄の神と食の文化』青春出版社、2003年。
- 板垣裕之『琉球の神社史』琉球歴史伝承所、2021年。
- 稲福政斉『ヒヌカン・仏壇・お墓と年中行事』ポーターインク、2022年。
- NPO法人 那覇市街角ガイド、「コース4古都首里城下の史跡探訪」、<https://www.naha-machikado-guide.com/course4.html>, accessed 27 August 2023.
- 上杉千郷『狛犬事典』戎光祥出版、2001年。
- 上江洲均・宮城篤正「首里の石敢當」『沖縄県立博物館紀要』第1号、1975年3月、1-18頁。
- 越智郁乃「墓の移動に見る現代沖縄の墓制と祖先祭祀の変化」『比較家族史研究』第32号（2018年3月31日）、92-118頁。
- 公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会、「メモリアルコラム」公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会、<https://oki-memorial.org/column/faithtgraveinokinawa0727>, accessed 15 September 2023.
- 小玉正任『石敢當』琉球新報社、1999年。
- 周星「中国と日本の石敢當」筑波大学『比較民族研究』7号、1993年3月、5-25頁。

- 蔣明超「中国北方と南方における石敢當の比較研究－山東省と福建省を例に－」神奈川大学『非文字資料研究』18号、2019年9月30日、199-221頁。
- 高橋誠一「那覇市壺屋地区における石敢當と集落形態」関西大学『アジア文化交流研究』3巻、2008年3月、7-23頁。
- 高橋繁行『土葬の村』講談社現代新書、2021年。
- 田中裕介「17世紀の唐人墓－考古学的研究の現状と課題－」『史学論叢』47号、2017年、19-54頁。
- 名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社、1999年。
- 濱下武志『沖縄入門』ちくま新書、2000年（姓を浜下としている）。
- 福島俊介『沖縄の石造文化』沖縄出版、1987年。
- 平敷令治『沖縄の先祖祭祀』第一書房、1995年。
- 松井幸一「石敢當の伝播による形態・意味の変容に関する予察的考察」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/hgeog/2019/0/2019_130/_pdf/-char/ja, accessed 28 August 2023.
- 宮里千里『沖縄 時間がゆったり流れる島』光文社新書、2003年。
- 山里純一「石敢當覚書き」琉球大学法文学部『琉球大学学術リポジトリ』2007年11月11日、37-68頁。
- 吉海直人「『石敢當』を知っていますか」同志社女子大学ホームページ、https://www.dwc.doshisha.ac.jp/research/faculty_column/13957, accessed 27 August 2023.
- 「石敢當（古さ）」、https://www.kinseiizen.com/ranking/25_ishiganto%20oldness.html, accessed 27 August 2023.